

〈修士論文要旨〉

イノシシの行動特性と放置竹林の関係

安藤 誠也*

1. はじめに

近年、農業人口の減少と高齢化にしたがって、里山・里地の利用が少なくなっている。耕作放棄された田畑に形成された藪地や放置された竹林が、イノシシの餌場、潜伏地、移動経路となっている問題が指摘されている。

放置竹林の拡大については、三大有用竹と言われてきたモウソウチク・ハチク・マダケの竹林が、石油製品の普及で竹製品が使われなくなったことや、海外産のタケノコの大量輸入の影響を受けて各地で放置されている(柴田, 2003¹⁾)。特にモウソウチクが周辺二次林や手入れ不足の植林、耕作放棄地などに分布を拡大させている(鳥居・井鷲, 1997²⁾)。調査地域である滋賀県大津市においても、放置竹林や耕作放棄地が多く存在する。

放置竹林とイノシシの関係については、これまでに指摘されてきたところであるが(江口, 2003; 高橋, 2003; 安藤, 2004^{3) 4) 5)})、イノシシによるタケノコの利用状況を定量的に分析した事例はない。本研究では、イノシシのラジオテレメトリー調査による行動調査と、竹林内でのタケノコ食痕カウントを行い、両者の関係を定量的に分析していく。

2. 研究の方法

まず、当地においてラジオテレメトリー調査(安藤, 2004)によって得られた位置データを、現地調査や空中写真判読によって作成した竹林の分布と重ね合わせ、地図上にイノシシの竹林利用状況を表現してみた。

次に、各竹林に調査区を設置し、定期的に調査区内を踏査して、イノシシによって食されたタケノコの残渣のうち、タケノコの先端部分の数をカウントした。先端部分をカウントするのは、ほぼ全ての食痕において先端部分が残



写真:ハチクのタケノコを食べるイノシシ(06年6月22日撮影)

されており、重複カウントを防ぐことが出来るからである。カウント後のタケノコの残渣は、カウントの重複を防ぐため全て回収した。

調査区内において目視で確認した発筍には、すべて割り箸に油性ペンで番号を付けたものを番号札として添えた。さらに、イノシシがタケノコをどの様に食べているのかを確認するため、竹林内に自動撮影カメラを設置した(写真)。

3. 研究の結果

2003年10月から2004年9月に行った、ラジオテレメトリー調査によるイノシシの行動特性は、3月から7月にかけて竹林での行動が多く見られ、4月から9月まで耕作地周辺での行動が多く見られた。10月以降は堅果類やクズなどが繁茂する地域での行動が多くみられた。

2005年より行っている竹林踏査では、対象としたモウソウチク・ハチク・マダケのうち、モウソウチクは発筍前の前年10月頃からタケノコの食痕が少数ながら確認され、2月中旬までほとんど利用率に変化が認められなかった。その後2月下旬になって食痕数が上昇し始め、3月中旬に最も食痕数が多くなった。その後5月の中旬まで食痕数が多く見られ、6月に入るとほとんどなくなった。モウソウチク林内で発筍を目視で確認したのは4月に入ってからであったことから、それまでにイノシシによって食べられたタケノコは、地中にあったものである。

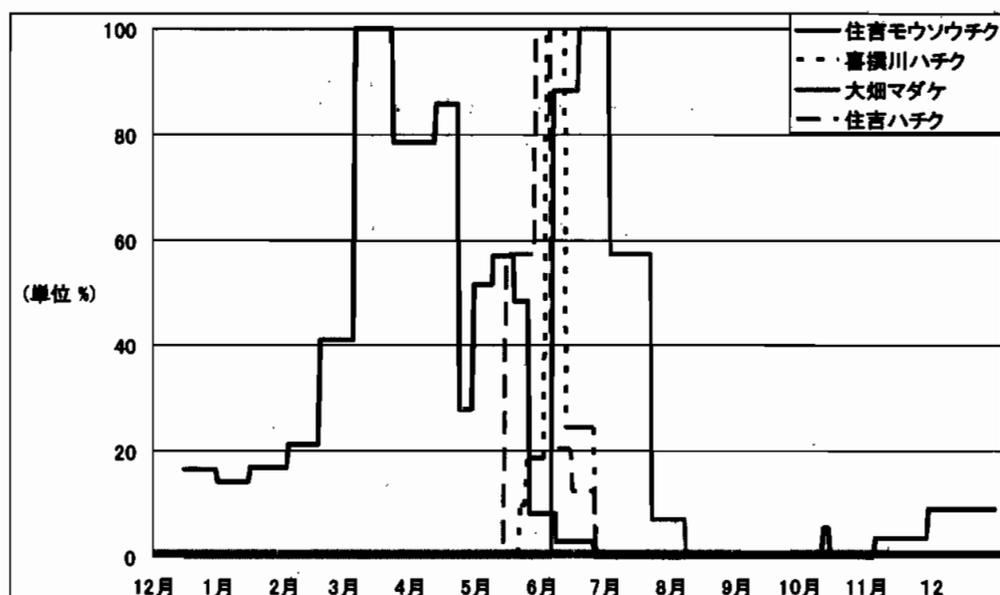
ハチクの場合、発筍前に食痕はほとんどなく、5月中旬に発筍が確認された後、5月下旬より急激に食痕数が増加した。最も食痕数が多くなるのは6月上旬で、7月になるとほぼ食痕はなくなった。また、イノシシによって食べられたものの多くが番号札をつけたものであったことから、ハチクの場合は、発筍後に多くが食べられたのである。

マダケの場合、発筍前に食痕はほとんどなく、5月下旬に発筍が確認され、その後6月上旬から食痕が見られ、食痕数が最も多くなるのは6月下旬であった。多くのタケノコの食痕がハチク同様、番号札を付けたものであったことから、発筍後にイノシシがマダケのタケノコをよく利用していた。

以上のことから、モウソウチクのタケノコは発筍前から盛んに利用されるのに対し、ハチク・マダケは出筍後、タケノコがある程度成長した段階で最も多く利用されていることが解る(図1)。

またモウソウチク・ハチク・マダケいずれの竹林においても、発筍が終了し竹稈の成長がほぼ終了したところから、伸長中の地下茎の食痕が確認された。

これらのことから、モウソウチク・ハチク・マダケの放置竹林が存在する場合、食痕数に変化が見られるものの、年間の多くの時期において、タケノコや伸長中の地下茎を求めてイノシシが竹林に引き寄せられ、重要な餌場となっていることが解かる。



図：竹林内に見られる季節ごとのイノシシによるタケノコ食痕数の推移
 (調査期間2005年12月15日～2006年12月31日) ※最も多く食痕があった時期を100としている

4. これからの課題

イノシシが食料としてタケノコにどの程度依存しているのか、胃内容物や糞を分析して明らかにする必要がある。イノシシがタケノコや伸長中の地下茎を食害することによって、竹林の生態にどのような影響を及ぼしているのかも検討していく必要がある。

文献

- 1) 柴田昌三 (2003)：モウソウチクと日本人。日本緑化工学会誌, 28 (3), pp406-411.
- 2) 鳥居厚志・井鷲祐司 (1997)：京都府南部地域における竹林の分布拡大, 日本生態学会誌, 47, pp31-41.
- 3) 江口裕輔 (2003)：『イノシシから田畑を守る』農山漁村文化協会, pp80-81.
- 4) 高橋春成 (2003)：大学と地域が一緒になってイノシシとの共存を考える—テレメトリー調査を中心に—。高橋春成編著『滋賀の獣たち—人と共存を考える—』サンライズ出版, pp163-194.
- 5) 安藤誠也 (2004)：日本イノシシに関する研究—農業被害地域におけるイノシシの行動特性—。奈良大学地理学科卒業論文。